

溪流遊漁者に対するアンケート調査

吉岡 剛

1. 目的

河川漁業協同組合は漁場を管理し、漁業権魚種の増殖を行うことで遊漁者から遊漁料を徴収している。レジャーの多様化などにより、河川遊漁者数は減少傾向にあり、遊漁料収入も減少傾向にある。遊漁者の確保は、河川漁業協同組合の経営安定に必要な不可欠である。そこで、県内河川を訪れる溪流釣り遊漁者のニーズ把握を目的としたアンケート調査を実施した。

2. 方法

アンケート調査は、溪流釣り遊漁者が多い県内7漁協（葛川漁協、朽木漁協、丹生川漁協、姉川上流漁協、大滝漁協、奥永源寺漁協、土山漁協）で令和5年12月から令和6年7月にかけて実施した。

溪流釣り解禁前に各漁協にアンケートを配布し、遊漁者が遊漁券を購入する際にアンケート記入を依頼した。解禁から1ヶ月程度経過した時点でアンケートを回収した。アンケート項目は、年齢、居住地、釣法、魚種、魚の持ち帰り状況、キャッチ&リリース区間の必要性とした。

3. 結果

アンケートの回収数は393枚であった。（葛川漁協62枚、朽木漁協71枚、丹生川漁協25枚、姉川上流漁協34枚、大滝漁協60枚、奥永源寺漁協98枚、土山漁協43枚）

年齢は、50代が25.8%と最も多く、次いで60代(23.2%)、70代(21.2%)、40代(14.8%)となり、50代以上が全体の73.5%を占めていた（図1）。

居住地は、滋賀県(48.5%)、京都府(17.9%)、三重県(13.0%)、大阪府(8.9%)、愛知県(6.4%)、岐阜県(4.6%)であり、約半数は

県内から遊漁に訪れていた（図2）。湖西地域（葛川漁協、朽木漁協）は京都や大阪、湖北地域（丹生川漁協、姉川上流漁協）は愛知や岐阜、湖東地域（奥永源寺漁協、土山漁協）は三重から訪れる割合が高かった。

釣法は、餌釣り(47.2%)、ルアー(27.8%)、テンカラ(13.3%)、フライ(11.7%)であった。

釣りたい魚種は、アマゴ(44.3%)、イワナ(43.5%)、ニジマス(12.2%)であった。

魚の持ち帰りは、一部持ち帰る(34.6%)、大物は持ち帰る(24.7%)、全て持ち帰る(23.7%)、全て放流する(17.0%)であった。

キャッチ&リリース区間については、必要(47.9%)、不要(50.3%)、知らない(1.7%)であった。

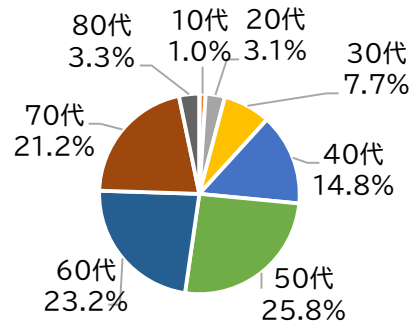


図1 溪流遊漁者の年齢

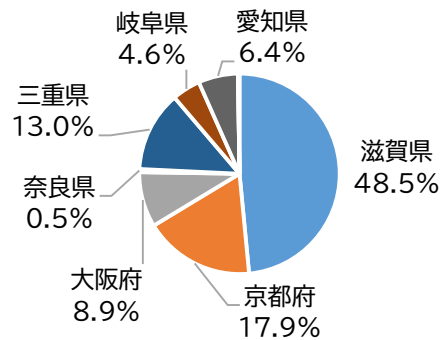


図2 溪流遊漁者の居住地